

氏名	あ だ ち た かし 定 立 崇
学位の種類	博 士 (人間・環境学)
学位記番号	人 博 第 238 号
学位授与の日付	平 成 16 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 4 条 第 1 項 該 当
研究科・専攻	人 間 ・ 環 境 学 研 究 科 人 間 ・ 環 境 学 専 攻
学位論文題目	「住まい」の場所秩序に関する建築論的研究 ——台湾ヤミ族の「住まい」をとおして——

論文調査委員 (主査) 教授 伊從 勉 教授 福井勝義 教授 小川 侃 助教授 西垣安比古

論 文 内 容 の 要 旨

台湾本島とフィリピンのバタン諸島との間に蘭嶼という小島がある。ここには台湾原住民のヤミ族とよばれる人々が、山を背に海に臨んだ扇状地に集落を形成して暮らしている。集落内には海と山を結ぶ方向に棟の方向が直交する主屋 vahay や、平行する副屋 makarang, 涼台 tagakal が建てられ、家屋宅地が形成されている。本論文は、そうしたヤミ族の「住まい」を生きられ体験される空間として捉え、その場所秩序の人間学的意味を明らかにする建築論的試みである。全体を通じヤミ族の「住まい」の場所秩序を明らかにする建築論的試みである。全体を通じヤミ族の「住まい」の場所秩序を明らかにするとともに、その「住まい」の成立基盤となっている場所の構造究明を試みている。本論文の全体は6章よりなる。

第1章ではヤミ族の神話・伝説の解釈をとおして、方位観や世界観と密接に関わる海と山の意味を明らかにしようとした。ここでは海と山が特別な意味を帯びて発ち現れてくる洪水神話に着目した。洪水に際し海は「住まい」や人の生命を脅かし無化するものとして発ち現れる。そうした海から逃がれ、留まることのできる最終的な場所は、集落の背後にそびえる高い山であった。その山頂が海の真ん中に残ったとき、そこは唯一の大地であり、まさに不動性を有する世界の中心 avak であった。ヤミ族はそうした海と山のはざまにおいて、海-山方向に規定されつつ「住まう」ことが明らかとなった。

第2章では生活の基本的場所とされる主屋 vahay の四つの形式(1~4門 vahay)に着目し、その空間構成の共通点と差異から vahay の建て替えの意味を明らかにしようとした。1門 vahay から4門 vahay までの展開は dovahay という内奥の場所が日常性を失い、聖性を強化していく過程であったことを示した。また、3門 vahay から4門 vahay への展開からは、そうした dovahay に親柱 tomok や飛魚の炉を隔離しつつ海-山方向に沿った象徴的結びつきを保持していく、奥行きのある空間構成が読みとれることを明らかにした。

第3章では、主屋 vahay の建造過程をとおして、vahay が「住まい」としてどのように形成され秩序づけられるかを明らかにしようとした。ここでは親柱 tomok の立てられる場所 mavak をとおして vahay の場所秩序を明らかにしようとした。ヤミ族にとって「vahay の靈魂」ともいわれる大 tomok は、「住まう」人にとっての中心あるいは根拠として mavak に立てられている。またその大 tomok と海-山方向に結びつく山は、唯一不動性を有した場所として、より根源的な中心である。そうした大 tomok と山とを結びつけるのは海-山方向に沿ってある「中心・中間」 mavak という場所であった。mavak は海-山方向に大 tomok や山と結びつく通路として、さらに不動性を有した中心として設けられていることが明らかとなった。

第4章では、主屋建造後に行われる落成礼 mivazay に着目し、落成礼が主屋 vahay を「住まい」とすることとどのように関わっているかを明らかにしようとした。そして、落成礼における儀式や歌会の過程から、新たに建造した vahay が死霊 anito という否定性を介して内部と外部の未分化な両義的場所とされ、その後内部と外部が再分節されてはじめて「住まう」ことのできる場所となることが明らかとなった。

第5章では、さまざまな禁忌によって生活行為が規定される飛魚漁期に着目し、就寝や食事といった行為の通常のとときと

飛魚漁期のときの差異をとおして、「住まい」の場所の秩序の変化とその意味を明らかにしようとした。通常家長は、「中心・中間」の場所 mavak に定位し tomok や山の不動性および中心性と結びついているが、飛魚漁期になると mavak から外れ、脱中心化する。それと同時に mavak は男性側と女性側との境界として発ち現れる。そして飛魚漁期が過ぎればふたたび家長も mavak も一体的に中心化される。こうした場所秩序の循環的変換によって、「住まい」における家長や mavak の中心性が新たにされ保持されていることが明らかとなった。

第6章では、葬送儀礼に着目し、家人や他者の死に際しての「住まい」の場所秩序の変化とその意味を明らかにしようとした。葬送儀礼では海-山方向に秩序づけられた背もたれ石が倒されることで家人の死が象徴的に表現され、そこに死の不安の場所が発ち現れた。告別の儀式では、告別者が棟の上に立ち死霊の島のある海の彼方に向かって告別の言葉を述べる。このとき葬儀参加者も海の彼方を向きこれを謹聴する。こうして、海の彼方と死霊の島とが重ね合わされ、世界が厚みのある二重化した世界として生きなおされ、自らのおいてある場所が海-山方向に再秩序化されることが明らかとなった。

以上の論究でヤミ族にとって「住まい」は不動性を有した中心であり、通路であり、境界であることが示され、そうした場所の根底にはすべてを無化する場所があり、「住まい」はその成立基盤に無化する場所を有していることが明らかとなった。

論文審査の結果の要旨

建築学の分野における住居の悉皆的調査研究は今和次郎の考現学以来、厚い研究蓄積がある。しかし、それらは住居の分類や機能を記述しはするが、人にとって世界を象徴する場所として住居がどのように成立しているかについて問うことは少なかった。本研究は住まいで行われる日常生活や儀礼に着目し、住まいの諸場所がどのように構成されるかを問うとともに、そのような諸場所の構成を成立させる基盤をも問おうとしている点において独創性のある研究といえる。

まず、ヤミ族の神話・伝説、特に洪水神話の解釈をとおして、方位観や世界観と密接に関わる海と山の意味が明らかにされている。洪水に際し海は「住まい」や人の生命を脅かし無化するものであるのに対して、山は唯一の大地であり、まさに不動性を有する世界の中心（アヴァック）として現れる。住まいは洪水時のその「中心」の再現として捉えられていることを明らかにした。

次に、海-山方向に規定されて造られる主屋（ヴァアイ）の四つの形式（1～4門主屋）に着目する。表と奥からなる空間構成は共通だが、主屋の規模の拡大に伴い奥の空間のドヴァアイが分化して最奥部が日常性を失い、聖性を強化していく過程を確認した。3門主屋から4門主屋への展開は、奥部のドヴァアイに親柱（トモック）や儀礼的意味を持つ炉を隔離しつつ、「海-山」方向に沿った奥行きのある空間を構成して行く過程であることが明らかにされている。従来、1～4門主屋の平、立、断面の悉皆的調査は行われているが、規模の変化過程における住まいの場所の意味の研究は初めての試みであり、神話、儀礼の調査を伴うこの研究の特筆すべき成果と言える。

さらに主屋（ヴァアイ）の建造過程と落成札（ミヴァライ）をとおして、住まいの中心を示す柱（大トモック）が立つマヴァックが、「海-山」方向に大トモックや山と結びつく通路として「中間」の意味を持つことが明らかにされている。また、落成札における儀式や歌会の過程から、新たに建造される主屋は浸入してくる死霊（アニト）によって内外未分の不安な場所としてまず設定され、その後内部と外部が再分節されてはじめて「住まう」ことのできる場所となることが明らかにされている。パシュラール、ボルノー、シュルツらによって住まいの中心性、庇護性が強調されて来たが、この研究においてはそのような中心性、庇護性が成立するためには、それ以前に無秩序で不安な状態が儀礼的に設定されることを見いだしている点に独創性があるといえる。また、主屋の落成札（ミヴァライ）についての建築学分野からののはじめての報告である点においても価値がある。

最後に、飛魚漁期、葬送儀礼においても「住まい」の庇護性の成立にはそれを否定あるいは無化する契機が介在することを見いだしていることは、本論文の論理が一貫していることをよく示している。前者においては「中心・中間」の場所としてのマヴァックが脱中心化され、男性側と女性側の境界としての意味を持つようになるが、飛魚漁期が過ぎればふたたび中心となる。こうした場所秩序の循環的変換によって、「住まい」における家長やマヴァックの中心性が更新されることが示される。葬送儀礼では「海-山」方向を向く背もたれ石が倒されることで家人の死が象徴的に表現され、そこに死の不安の

場所が発ち現れた。告別の儀式では、告別者が棟の上に立ち死霊の島のある海の彼方に向かって告別の言葉を述べる。こうして、海の彼方と死霊の島とが重ね合わされ、生き残るものたちの場所が「海－山」方向に再秩序化されることが明らかにされている。

以上のように、ヤミ族にとって「住まい」は不動の中心であり、通路であり、境界でありうるが、それがそうでありうるのは、その特性を否定し、不安にする契機を儀礼的に発現させることによって初めて可能になることを、本研究は長期にわたるフィールド調査とその解釈によって解明した。住まいを解釈する学問的方法を従来の建築学にはない領域にまで広げた点で高く評価できる。

本論文は、環境としての住まいの場所を人のあり方との関わりの中で原理的に究明しており、人間・環境学研究科の基礎理念および、自然・人間共生基礎論講座の研究方針にも合致している。

よって本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また平成16年1月30日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。